

抄 訳

チャールズ・ディケンズ

ボズのスケッチ集(3)

原 英一 訳



解 題

ここに訳出したのはディケンズの最初の作品集『ボズのスケッチ集』(Sketches by Boz, 1836)の一部である。本誌創刊号には「我が教区」(Our Parish)の中から「教区役人、教区の消火ポンプ、学校教師」と「牧師補、老婦人、退役海軍大佐」、「教区役人選挙」、「ブローカーの助手」を掲載した。第5号では「情景」(Scenes)から、「朝の街頭」、「夜の街頭」、「セヴン・ダイヤルズ」、「モンマス・ストリートでの瞑想」、「民法博士会館」、「ロンドンのレクリエーション」を訳出した。本号では、同じく「情景」から「アストリー劇場」、「議会のスケッチ」、「ジン酒場」を掲載する。

原テキストは『オックスフォード挿し絵入りディケンズ』(The Oxford Illustrated Dickens, London: Oxford UP, 1957)。142, 143 ページの挿絵は当時の雑誌等から採録したもので、158 ページの挿絵はクルックシャンク(George Cruikshank)によるもの。

アストリー劇場

本の中とか、店のウインドウ、壁にかけられたプラカードなどにひどく大きく目立つ黒のローマン体の大文字を見かけると、初めてアルファベットの神秘について手習いを始めた頃のぼんやりと混乱した記憶がたちまち蘇ってくるものだ。字の形を我々の困惑した想像力により強く印象づけるために文字の後に続いているピンの先が見えるような気がするくらいである。そして、一週間九ペンス又は一季につき十六ペンスで教育の基本原則を我々の精神にたたきこんでくれたあの尊敬すべき老婦人が、我々がいつも陥っている思考の混乱を整理する方法として、我々の未熟な頭にとときどき振舞ってくれた固いげんこつを思い出して、思わず身をすくめるのである。他の多くの場合にも、同様の感情が我々につきまとうのであるが、アストリー劇場ほど我々の子供時代の記憶を強烈に呼び起こす場所は他にない[後で分かるように、ここは演劇、曲芸などの他に曲馬も見せ物としていた大衆劇場であった]。その当時、そこは「王立円形劇場」ではなかったし、ダクロウ [ウィリアム・ダクロウ (一七九三—一八四二) アストリー劇場で活躍した曲馬師・支配人] も未だ円形曲馬場のおがくずの上に古典的趣味と移動式ガス灯の光りをもたらしべく台頭してはいなかった。しかし、その場所の性格は全体としては変わらず、道化師のジョークも同じであったし、曲馬師たちも同じく堂々としていたし、喜劇役者たちも同じく機知に溢れ、悲劇役者たちは同じくしゃがれ声であり、「高度に訓練された」馬たちも同じく活力に満ちていた。アストリー劇場はよい方へ変わった。我々が悪い方へ変わっただけなのだ。我々の芝居趣味は失われ、恥じらいつつ告白するが、かつてあんなに楽しんだ見せ物よりも、観客たちの方が我々にははるかに楽しく面白く思ってしまうのである。

我々は復活祭あるいは洗礼者ヨハネ祝日にアストリー劇場にくり出す常連の一行を見るのが好きである。パパとママに九人か十人の、背丈は五フィート六インチから二フィート十一インチ、年齢は十四歳から四歳までという子供たちだ。先日の晩、劇場の中央ボックスの一つにちょうど着席したとき、我々がアストリーの客の一団の理想像を描きたいと思っていたとすれば、まさにおあつらえ向きの一団が隣のボックスに席を占めたのである。

まず第一に、三人の小さな男の子と一人の小さな女の子がやってきて、ボックスの入口から非常によく聞こえる声で発せられたパパの命令に従って、前列の座席を占めた。次にさらに二人の女の子が、明らかに家庭教師とおぼしき一人の若い婦人に案内されて入ってきた。それからさらに三人の男の子が入ってきて、彼らは最初の連中と同様に青の上着とズボン、それに折襟のシャツのカラーを身に着けていた。それから、組紐で飾られた

フロック着て、ひどく大きな丸い目を最大限に見開いて、高度な驚愕状態にある一人の子供が、座席の上に持ち上げられて運ばれた——その作業の間、その子の小さなピンク色の両足がかなりむき出しになってしまったのだが。それから、パパとママが来て、さらに長男が入ってきた。彼は十四歳の少年で、自分はこの家族とは赤の他人だという様子を見せようと明らかに努力しているのであった。

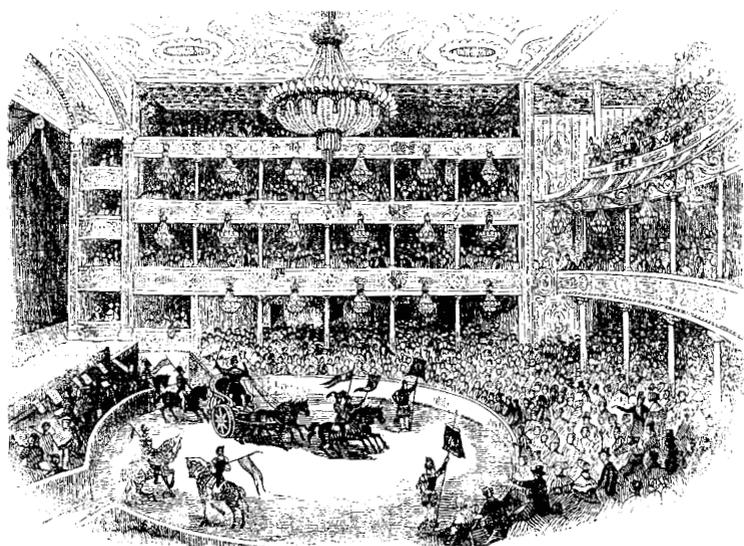
最初の五分間は、女の子たちのショールを脱がせ、彼女らの頭髪を飾っている蝶形リボンを直すのに費やされた。それから、男の子たちのうちの一人が座った場所が、柱の陰で舞台が見えないことが幸いにも判明した。そこで家庭教師が柱の背後に移されて、少年は彼女の席に持ち上げられて移された。それからパパが男の子たちを整列させて、彼らがハンカチーフをしまうのを指揮し、ママは、まず家庭教師に向って女の子たちのフロックをもう少し肩の下まで下げるようにうなずいたりウインクしたりして合図した後、この小軍団を閲兵するために立ち上がった。この検閲は彼女自身にはたいへん満足な結果をもって終わったようである。というのも、彼女は座席の反対の端に座っているパパの方を満足げに見たからであった。パパも一瞥を返して、ひどく力をこめて鼻をかんだ。そして、あの哀れな家庭教師は、柱の背後から覗き込んで、この家族全体を大いに賞賛していることを表す表情で、ママの視線をおずおずと捉えようと試みた。それから、アストリー劇場がドルリーレーン劇場の二倍の大きさがあるのかどうかについて議論していた男の子たちのうちの二人が、この問題を「ジョージ」の判断にゆだねることで同意した。「ジョージ」というのは前に述べたあの若い紳士のことであるが、これを聞かれて彼は憤慨し、公共の場所で自分の名前をそんなに大きな声で呼ぶのは甚だしく不適當であると、きわめて穏やかならぬ言葉遣いで諫言した。すると子供たち全員が腹を抱えて大笑いし、男の子たちの一人が、「ジョージのやつは自分のことをもうすっかり大人だと思い始めてるんだ」という自分の意見を表明して締めくくったので、パパもママも笑った。そして、ジョージは（彼は礼式用ステッキを持ち頬ひげをたくわえようとしていたのだが）、「ウイリアムのやつはいつも生意気を言うようにそそのかされていやがる」とつぶやき、深い軽蔑の表情を浮かべ、それがその晩ずっとそのままになっていたのである。

劇が始まると、男の子たちの興味は際限がなかった。パパも明らかに興味を持っている様子であった。もっとも、彼はそうでないかのようなふりをしようとして無駄な努力をしていたのであるが。ママに関して言えば、彼女は主役の喜劇役者の滑稽な言動にすっかりまいってしまい、ゆったりした帽子の巨大な蝶形リボンの一つ一つが震えるほど笑ったのである。すると、家庭教師がまた柱の陰から覗き込んで、ママの視線を捉える度に、ハンカチーフを口にあて、義務に従って自分も抱腹絶倒しているように見せるのであった。それから、見事な鎧を身に着けた役者が、必ずや姫を救い

出してみせませぬぞ、さもなくばわが命を捨て去るのみ、と誓うと、男の子たちは熱狂的に拍手喝采した。中でも、どうやらこの一家の客人であって、ママを一回り小さくしたように見える十二歳のコケティッシュな女の子とその晩の間ずっと子供っぽい恋愛遊戯を続けていた小さな奴などはとくに熱狂的だった。この女の子は、他の女の子たちと同様に（彼女たちは、概して言えば、ずっと年長の女たちも顔負けのコケティッシュなところを備えていたのであるが）、件の騎士の従者がお姫様の腹心の奥女中にキスしたとき、いかにも淑女らしくショックを受けた様子を見せたのであった。

円形演技場での演技が開始されると、子供たちは大はしゃぎである。そして、進行中の出し物を見たいという願望に負けて、威厳などかなぐり捨てたパパは、ボックスの中で立ち上がり、子供たちの誰にも負けないほど大きな拍手を送ったのであった。家庭教師が、馬術の離れ業の合間ごとに、ママの方に体を傾けては、今終わった曲技についての子供たちの気のきいた言葉を詳しく話して聞かせてやると、ママの方はすっかり気前よくなり、家庭教師に酸味ドロップを差し出してやる。家庭教師は、奥様に目をかけていただいたことに満足して、表情も明るく再び柱の背後に引っ込むのであった。こうして、この一行全員がすっかり上機嫌であるように思われた。ただ、ボックスの後ろにいる例のしゃれ者だけは例外だ。彼は子供たちに興味を持つにはあまりに偉ぶっていたし、他の誰かに興味を持ってもらうにはあまりに取るに足らない存在であったので、頬髭があるべき場所をこすってみるという作業をときおり行いつつ、おのれの栄光の中で完全に孤独であった。

誰であろうと——アストリー劇場に二、三度足を運んでみた結果として、寸分違わぬ同じジョークが毎晩毎晩、そして毎シーズンごとに繰り返されている、その執拗さを評価できるようになった人間であろうと、その演目の少なくともある部分についてはぜったいに面白いと思うはずである。つまり、円形演技場の中で展開される場面のことである。ガスのジェットからなる曲技用の輪が下ろされ、平土間から追い出された半額入場者たちに便宜をはかるために幕が引き上げられ、オレンジの皮が片付けられ、数学的な正確さでおがくずが振り撒かれて完全な円ができあがると、我々自身としても、その場にいる一番幼い子供と同じくらいの興奮を感じてしまうのを知っているのだ。そして、実際、「さあ、始まるぞ！」という道化師の甲高い叫びの後にわき起こる笑いに、昔のよしみでつい加わってしまうのである。そしてまた、我々は、道化師に続いて手に鞭を持って現れると、優美な威厳を持って観客に頭を下げる、あの主任馬術師に対する昔の崇敬の感情を完全に失うこともできないのである。彼は茶色の飾り紐ボタンの付いたナンキン木綿の化粧着を着た二流の馬術教師などではなく、主役の騎手たちのための本物の後見助手なのだ。この騎手たちというのは、いつも上着の胸の中にテーブルクロスを入れた軍服を着込んでいるという



アストリー劇場の内部。本物の馬を使ったショーが演じられていた。

いでたちのおかげで、ロースト用に串刺しにされた鳥を強く連想させられてしまう。この主任馬術師とはいえば——しかし、なぜ我々は、どんなふうにも描写してもとうてい表現し得ないものを描写しようと試みるのであろう。誰でもその男を知っており、誰でも彼の磨き上げられたブーツを、彼の優雅な物腰を、審美眼に欠けたある種の連中が嫉妬心のあまり、ぎくしゃくしているなどけなしたあの物腰を、額のずっと上の方で分けられていて、思慮深さと詩的な憂鬱さの表情をその顔に与えている、あの見事な黒髪を憶えているのだ。ちょっとした冗談を言って道化師の機嫌を取るときの、彼のやわらかで快い声もまた、その高貴な態度と完璧に調和しているのである。そして、彼が自らの威厳をはっきりとして思い出し、「さて、君、ウールフォード嬢をお連れしてくれたまえ、君」と叫ぶ様子は決して忘れ得ないものである。彼がウールフォード嬢を演技場に案内し、彼女を助けて鞍に載せた後、彼女の妖精のような駿馬が演技場内を回るのについてゆく時の優美な物腰もまた、その場にいるすべての女中たちの胸に深い印象を刻まざりにはおかないものなのである。

ウールフォード嬢と馬とオーケストラとが、ひと息つくためにいっせいに止まると、彼は洗練された態度でおよそ次のような会話に参加する（口火を切るのは道化師である）。「ねえ、だんな！」——「何かね、君？」（会

話はいつもきわめて丁重に行われるのである) ——「もしかして、私が軍隊にいたって話はお耳に入っておりませんかね？」——「いいや」——「実はそうだったんですよ、だんな、体操をやることだってできるんですぜ」——「本当かね、君」——「今やってみようか、だんな？」——「よければやってくれたまえ、さあ、君、急いでくれよ」(長い鞭が一撃され、「やめてくれ、そいつは嫌いなんだ」と道化師が言う)。

ここで道化師は床に身を投げ、様々な痙攣するような曲芸的

動作を行い、体を折り曲げたり、またもとにもどしたり、人間の苦痛の最も絶望的な極限状態にある男の表情を迫真の演技で見せたりして、天上棧敷の連中は大声を出して喜ぶのである。やがて、彼はあの長い鞭の二度目の打撃と「ウールフォード嬢がどうして止まっているのか見てきてくれたまえ」という要請によって中断させられる。すると、彼は、「さて、ウールフォード嬢、私めはあなた様のためにどこへ行って何を取ってきて持ってきて運んできておやりになればよろしいんでござりましょうか、お嬢様」と叫び、天上棧敷を言いやうもなく楽しませる。そのご婦人が、優しく微笑みながら、旗が二本欲しいのよと告げると、さまざまのしかめ面をしたあげくにこの品物が用意されて手渡される。道化師はこの後段の儀式を終えると、おどけた口調でこう述べる——「やっほう！ねえ、だんな、ウールフォード嬢はあっしに気があるみたいですが、あっしに微笑みかけてくれやしたからね。」もう一度鞭が一撃され、オーケストラが咆哮し、馬が跳ね、ウールフォード嬢が再びその優美な演技をしまわり、観客は老いも若きも皆楽しむのである。次の休止でまた同じように滑稽なやり取りの機会が提供されるが、唯一前と違う趣向とはいえば、主任馬術師が背を向ける度ごとに、道化師が彼に向っておどけたしかめ面をしてみせることである。そして、馬術師の注意を前もってあさっての方向に向けたうえで、彼の頭の上をジャンプして飛び越えると、演技場からようやく退場するのである。



読者諸君の中で、二流劇場の楽屋口で日中たむろしているある種の連中に気づいた方はおられるだろうか。こうした出入り口を通りかかるとまず必ずと言っていいほど、三、四人の集団が舗道の上で話をしているのが見かけられる。酒場の個室にでも入るような、何とも言いようのない尊大な態度とある種の人目を意識した様子とがこの類の人々に独特なものである。彼らはいつも自分を見せびらかしていると思っただけに見える。彼らの眼前にはいつもランプがあるのだ。色あせた茶色の上着と非常にたっぷりした薄緑色のズボンを身に着けたあの若い奴は、自分のチェックのシャツの袖口をまるでそれが最上級のリンネル製でもあるかのようにこれみよがしに引き下ろし、一昨年の夏の白い帽子を、まるで昨日買ったばかりのものででもあるかのように、気取った様子で右の目の上に傾けている。あの汚れた白の毛糸編の手袋とすり切れた上着の胸に差し込まれた安物の絹のハンカチーフを見てみたまえ。一目で彼が端役の男優であることが分かるはずだ。彼は半時間の間、青のシュルトゥ、きれいなカラー、白いズボンを身に着けた後、自分の着古したわずかな衣服の中に縮みこんでしまうのだ。彼は、一週間に一ポンドの給料と自分のブーツを得なければならぬことを辛く意識しながらも、毎晩毎晩自分の素晴らしい財産を自慢しなければならず、ニューカット〔最悪の貧民街の一つ〕にある三階の自分自身の裏部屋を陰気に思い出しながら、田舎にある父の大邸宅のことを自慢しなければならず、大金持ちの女相続人に愛される恋人として羨望と追従のまとなりながら、その間ずっと、家にいる元踊り子は妊娠していて失業中だということを思い出していなければならないのだ。

おそらく彼の傍らに見かけられるであろう人物は、てかてか光る黒の服を着て、自分の靴のかつて踵のあった部分をトネリコのステッキで物思わしげにこつこつと叩いている、非常に面長の、痩せた青白い男である。彼は、くどくど話す父親とか、忠実な召使いとか、牧師補、地主、その他の重厚な役柄をこなす役者だ。

ところで、父親の話が出たついでであるが、我々はすべての登場人物が孤児であるような芝居を見たいものと強く希望している。舞台上では父親というものは、例外なしにひどく邪魔なものであって、主人公か女主人公に対して、幕が上がる前の事情について、いつも長々と説明をしなければならぬ。それは、「我が子よ、お前の亡き母親が（ここでこの老いぼれ悪党は口ごもる）、お前を私の手にゆだねてから、かれこれ十九年になる。あの頃お前はまだ赤ん坊であった」云々、という台詞で始まるのだ。さもなくば、父親たちは、三つの長い幕の間中ずっと微塵の疑いもなく常に交流してきていた誰かが、全く突然、自分の子供であることを発見しなければならない。その場合、彼はこう叫ぶのだ。「ああ、これはいったい何だ。これはあのプレスレットではないか。あの微笑み。この書類。あの眼差し。夢かまことか。間違いない。そうだ、そうなのだ、これこそ我が子じゃ！」——「お

父上！」と子は叫ぶ。そして、彼らは互いに抱き合い、お互いに肩越しに向こうを見ると、観客の方は盛大に拍手喝采するのである。

閑話休題。我々は、二流劇場の楽屋口の外で話したり、ポーズを取ったりしているのはこういう種類の連中であると言おうとしていたところであった。アストリー劇場では、彼らは他のどんな場所よりもずっと沢山いる。たいてい、窓枠に腰掛けている馬番が一人か二人いて、その他、チェックのネッカチーフと黄ばんだリンネルを身に着けた汚れた落ちぶれ紳士が二、三人、たぶん古新聞紙にぞんざいに包まれた舞台用の靴一足を小脇にかかえてぶらぶらしているものである。数年前、我々は、神秘的な好奇心を感じながら、これらの連中をばかんと口を開いて見ていたものであり、それを思い出ただけで、これを書いている今でもつい微笑が浮かんでくる。夜は乳白色のチュニック、鮭肉色のストッキングに青のスカーフといういでたちで、照明、音楽、そして造花のきらびやかな中を、毛並みのよいクリーム色の馬に乗って、我々の眼前を飛び回ったあの輝かしく優雅な者たちが、昼間我々が目にするこの色あせた、放蕩者然とした連中と同じであるとは、我々にはとうてい信じられなかったものだ。

今でも我々にはそのことがほとんど信じられない。下級の役者たちに関しては、我々も多少の知識があるおかげで、舞台を闊歩していた紳士の正体が「うす汚れたしゃれ者」であり、コミックソングの歌手が酒場の駕籠かきであり〔駕籠とはセダンチェアのこと、前後を人が持って運ぶ乗り物〕、主役級の悲劇役者が悲嘆にくれた酔っ払いであることを看取するのに、想像力をとくに働かせる必要はないのである。しかし、あの特別な連中となると話は違って来る。彼らは神秘的存在であって、演技場の外で姿を見かけることは決してないし、神々や風の精の衣装を着けていない姿を見ることも決してないのである。この連中に加えることがほとんど不可能であるダクロウを例外とすれば、あれはアストリー劇場の騎手だ、と分かったり、あるいは騎乗した姿でない彼を見かけたりした者などいるであろうか。あの軍服を着た我々の友が、すりきれた衣服で姿を見せたり、あるいは、日常生活の比較的詰め綿の少ない衣装に身を落すなどということがありうるだろうか。あり得ない！我々にはそんなことは信じることができない、いいや、信じたくない。

議会のスケッチ

読者諸氏におかれては、このかなり不吉な表題におそれをなすことがないように願いたい。ご安心あれ。我々は政治的議論をすることはないし、またいつも以上に無味乾燥になる気などさらさらないのである——ただし、そうできればの話ではあるが。我々はただ、「議院」の外観や重要な審議

の際にそこに集まってくる群衆をちょっとスケッチしてみると、何か面白いことになるのではないかと思いついただけなのだ。そこで、我々は以前、前述の議院を少なからず訪問する機会があったことだし、実際のところ、我々の目的には十分なくらい頻繁に、また我々の個人的な平安と慰めをかき乱すくらい何度も何度も訪れたことがあったのであるから、この描写を試みようと思つたに至ったのである〔ディケンズは速記者として議会に通っていた経験がある〕。それゆえ、議員の特権濫用とか、守衛官とか、重々しい弾劾とか、さらに重々しい報酬とかについておぼろげに考えると浮かんでくる畏敬の気持ちを、我々の心から追い払って、さっそくその建物に入り、本題に入ることとしよう。

四時半である——そして五時になると勅語奉答文發議人が「[発言のため]両脚で立ち上がる」であろう。これは新聞がときどき目新しさをねらって使う表現だが、これではまるで発言者というのは、概して、時として逆立ちする癖があるとでも言っているかのようだ。議員たちが続々と流れ込んできている。通路で立ち見の場所を獲得できた小数の見物人が、彼らを通り過ぎるのを仔細に観察しており、議員が誰か知っている人間は大変な重要人物となるのである。時折次のような真剣なささやき声が聞こえてくる。「あれがサー・ジョン・トムソンだ」「どれが？あの首のまわりに金の勲章を着けたやつかい？」「違う違う、あれは勅書送達吏の一人だよ——あのもう一人の黄色い手袋をしたのがサー・ジョン・トムソンだ」「ミスター・スミスが来たぞ」「へえ！」「そうだ、ごきげんよう、先生——彼はうちの選挙区の新人なんだ——ごきげんよう、先生」ミスター・スミスは立ち止り、魅力的な都会風のしぐさで振り返ると（というのは、解散が近いという噂がその日の朝広く流布していたからなのだが）、自分の選挙区民の両手を握り締めて満足させてやり、そしてこれ以上はないくらいの熱意をこめて彼に挨拶した後で、公の大義への情熱を派手に誇示しながらロビーの中に飛び込んでゆく。こうして彼の「同郷の土」の胸に大いなる好印象を残してゆくのである。

到着議員の数は増え、熱気と騒音が非常に不快な率で高まってゆく。お仕着せを着た召使たちが通路の両側に一つの完全な小道を形成するので、追い出されるのを避けるためには、これ以上はないくらい狭い場所に自分を押し込めなければならない。青の上着の、奇妙なつば広の帽子をかぶり、白のコールテンのズボンと大きな長靴を履いた、しわがれ声の太った男が見える。彼は過去半時間の間絶え間なくしゃべり続け、その尊大な態度が、門外漢たちの間に少なからぬ笑いのさざめきを引き起こしていたのである。あれこそウエストミンスター〔英国議会議事堂〕の偉大なる治安維持官なのである。たった今通り過ぎたある貴族閣下に挨拶する時の彼の優美な物腰や、群衆に説諭するときの彼の過度に威厳に満ちた態度などに必ず気づくはずだ。彼は、後ろにいるあの二人の若者が、ここにいる間中ずっと笑っ

てばかりいるので、今やかなり不機嫌になっている。

「ミスター——今夜採決が行われると思いますか？」と、群衆の中の小さな痩せた男が、この役人の歡心を買おうとせずと尋ねる。

「どうしてそんなことを聞くのかね、きみ」と、その役人はひどく大きな声で、右手に持っているステッキを不機嫌そうに握りながら答える。「やめたまえ、きみ。お願いだからやめてくれたまえ、きみ」小男はひどくばつの悪そうな顔つきになり、群衆の中でまだ経験の乏しい連中は腹をかかえて笑いころげるのである。

ちょうどその時、作り笑いを満面に浮かべた、どこかの不運な人物が、長い廊下の奥のところに現れる。彼は階下の特別警視の監視の目をまんまとごまかして、ここまでやって来られたことで明らかにご満悦の様子である。

「戻りたまえ、きみ——ここへ来てはいかんだ」としわがれ声の男は、その違反者を発見するやいなや、声も態度も途方もなく強調しながら叫ぶ。

そのよそ者は立ち止まる。

「聞こえるんだろう、きみ——戻るんだ」とこの官吏殿は、侵入者を五、六ヤードもおだやかに押し戻しながら続けるのである。

「おい、おれを押しすんじゃない」とよそ者は怒って振り返りながら言う。

「いや押ししてやるぞ、きみ」

「やめるんだ、お前」

「出て行きたまえ、きみ」

「おれに触るんじゃない、お前」

「通路から出たまえ、きみ」

「このいばりくさった小役人めが」

「何ですと？」とブーツの男は叫ぶ。

「いばりくさった小役人で、厚顔無知な野郎だと言ってるんだ」とよそ者は、今や完全に激昂して繰り返す。

「きみを追い出さなければならぬようなことにはさせないでくれたまえ、きみ」と相手は反撃する。「どうかやめてくれたまえ——私はこの通路を空けておくようにという指示を受けているのだ。これは議長の命令なので、きみ」

「議長などくそくらえ！」と侵入者は叫ぶ。

「おい、ウイルソン！、コリンズ！」役人は、彼にとっては大逆罪にも等しいこの侮辱的な表現を耳にして、実際茫然として叫ぶ。「この男をつまみ出せ、いいな、つまみ出すんだぞ！何てことを言うんだ、きみは」というわけで、この不運な人物は、階段を五段ずついっぺんに降りさせられるはめとなり、止まる度に戻ろうとして振り返り、警備司令とそのすべての手下どもに恨みをこめた復讐の言葉を叫ぶのである。

「道を開けてくれたまえ、諸君——議員先生たちのお通りだ、どうか道を開けてくれたまえ」とこの熱心な官吏は戻りながら叫び、その後から自由

独立派たちが列をなして続いてくるのである。

身に着けたリンネルと同じくらい青白い肌色をした、獷猛な顔つきの紳士がいる。大きな黒い口髭をしているので、もし彼の表情があの人間の顔の蠟細工のカリカチュアを神々しいものとしている思慮深さを備えていたら、床屋のウィンドウに飾られる人形のような外観であったことだろう。彼は国民軍士官であり、議院で最も面白い人物である。かれが安物のオランダ時計の中のトルコ人の頭のように目をぎょろぎょろさせながらロビーの方に大股で歩いて行くときの彼の物腰の道化じみた威厳ほど、この上もなく滑稽なものがあるだろうか。彼はいつも必ず汚れた書類の包みを左腕の下に抱えて現れるのだが、どうやらそれは一八〇四年度の雑件予算書か、同じくらい重要な書類ではないかと皆に思われている。彼は議院にはいつも定刻きっかりに出席し、彼が自己満足して「ヒヤ、ヒヤ」というと、しばしばそれが合図でもあるかのように皆がくすくす笑うのである。

この紳士こそかつて実際に旧下院の傍聴者席に使者を送り、単眼鏡を使用していた人物が彼をじろじろ見ていると議長に苦情を述べるため、件(くだん)の人物の名前を聞き出そうとした紳士なのである。また伝えられるところによると、別な時には、ベラミーのキッチン〔英国下院の副議院管理官であったジョン・ベラミーが一七七三年に議員用に設けた食堂。現在の議場の完成に伴い一八四八年に廃止された〕に赴いた際——ここは議員以外の者でも、いわば黙認の形で、入ることができる食堂なのだが——食事を取っていた二、三人の人物が議員ではないことに気づいた彼は、こいつらはこの場所ではおれの振舞に腹を立てることはできぬはずだと決めこんで、彼らが食事のテーブルの上に自分の足をブーツを履いたままで乗っけて座るといっておふざけを演じたということである。しかしながら、彼は概して無害であり、いつも面白い人物である。

忍耐と我らが友である例の衛視にコネがあるお蔭で、我々は何とかロビーに到達することに成功し、ドアが開かれて議員たちが入場してくると、議場の様子をちらちらと見ることができるようになった。すでに議場はかなりの入りであり、議員たちが小さな集団になってここに集まり、当日の興味深い話題を議論している。

ビロードの見返し布とカフスを着け、ひどく洒落たドルセイ帽〔フランスのドルセイ伯爵(一八〇一—一八五二)が流行させた帽子〕をかぶっている、黒い上着を着たあのあかぬけた風采の人物は、首都選出議員の「正直トム」である。そして、白の裏地の外套を着た大きな男——いや、あの柱の傍のやつじゃなくて、金髪が上着の襟の外から背中の方に出ているもう一人の方だよ——あいつが彼の同僚だ。あそこのもの静かな紳士らしく見える男、青のシュルトゥとグレーのズボン、白のネッカチーフと手袋といういでたちで、上着のボタンをきっちりとはめているので、堂々とした体躯と幅広い胸が大いに引き立って見えているあの男は、非常に有名な人物である。彼は昔は

多くの戦闘で戦い、神々が与え給うた武器すなわち両腕だけで、まるで昔の英雄のように制覇したのであった。彼の傍に立っている年老いた厳しい顔つきの男は、実は今やほとんど絶滅した種族のよい標本なのだ。彼は州の名門出身の議員であり、人間の記憶にある限りの昔からずっとそうだったのだ。彼の、両側に大きなポケットが付いていて、ゆったりして幅が広く茶色の上着、半ズボンにブーツ、とてつもなく長いチョッキ、その下にぶら下がっている銀の時計鎖、つば広の茶色の帽子と大きな蝶形に結ばれ、余った端がシャツのフリルから飛び出している白のハンカチを見てみたまえ。今日ではめったに見かけない衣装であり、それを着ている少数の者が死に絶えてしまえば、全く消滅してしまうだろう。彼は、フォックス〔チャールズ・ジェイムズ・フォックス(一七四九—一八〇六)、英国の政治家〕、ピット〔ウィリアム・ピット(一七五九—一八〇六)、英国の政治家、首相〕、シエリダグ〔リチャード・プリンズリー・シエリダグ(一七五五—一八一六)、英国の政治家。劇作家としても有名〕、それにキャニング〔ジョージ・キャニング(一七七〇—一八二七)、英国の政治家〕などの政治家たちや昔の議会の方がよく管理されていて、前もって全員に知らされている重要案件審議日を除けば、八時か九時に起きていたあの頃の方がよかったことなどについて、長々と話をしてくれる。彼はすべての若手国会議員をひどく軽蔑しており、少なくとも十五年間は一言も発言せずに議員を勤めない限り、傾聴に値するようなことなど言えるはずもないと思っている。彼は「若いマコーレイ」〔政治家であり、有名な『英国史』などを書いた歴史家でもあったトーマス・バビントン・マコーレイ(一八〇〇—一八五九)のことと思われる〕は全くの詐欺師であったという意見であり、またスタンレー卿〔エドワード・ジョン・スタンレー男爵(一八〇二—一八六九)、英国の政治家〕はそのうち何かやるかもしれないが、「若すぎるよ、きみ——若すぎるんだよ」彼は慣行についての諸問題に関しては卓越した権威であり、ワインをきこしめして口が軽くなると、サー某が、政府院内幹事だったときに、病床にあった議員四人をベッドから引きずり出して与党への賛成投票をさせ、そのうち三人は帰宅途中で死んでしまったとか、新しい蠟燭を持ち込むべきかどうかについて、かつて議院で採決が行われたことがあったとか、昔ある時など討議の終了の後で、議長が偶然議長席に着いたまま取り残されてしまったことがあって、議員の誰かが叩き起こされて連れ戻され休会動議を出すまで、三時間もの間一人で議場に座り続ける羽目になったとか、そういう種類の他の多くの逸話を話してくれるのである。

彼はステッキに寄り掛かってあそこに立っている。周囲の伊達男どもの群をきわめて底深い軽侮をもって見ながら、過ぎ去った昔、彼自身の気持ちももっと新鮮で明るかった頃、機知も才能も愛国心ももっと輝かしく盛んであったと彼には思われるあの頃の、昔の議院で見た光景を胸中に思い浮かべながら立っているのだ。

我々がここに立っていた間中、議場に入ってくるすべての議員に声をか

けているあの地の粗い大外套を着た若い男が何者なのか、読者は知りたいことであろう。彼は議員ではない。ただの「世襲奴隷」、つまり別な表現をすれば、アイルランドの新聞のアイルランド人特派員であり、たった今、これまで一度も会ったことのない議員から四十二個目の無料送達署名〔議員特権により議員の署名があると郵便物を無料で出すことができた〕を獲得したところである。ほら、また行くぞ。もう一個だ。あきれたやつだ、帽子にもポケットにももういっぱい詰め込んでいるのに。

我々は傍聴者席に入れるかどうか運だめしをしてみることにしよう。もっとも、審議内容から考えると成功はかなりおぼつかないのであるが。いったい全体お前は何をしているんだ。まるで命令すれば門がさっと開かれる魔除けのお札みたいに入場許可証をかかげている。ばからしい。そもそも取っておくだけの価値があるならの話だが、サインでももらうために許可証を取っておけばいい、そしてチョコキのポケットに親指と人指し指を意味ありげに差し込んで、ドアのところに現れればよいのだ。黒服を着たこの背の高いがっちりした男が門番だ。「空きはあるかね?」「全然ありませんよ——誰かが出て行くのを二、三十人の紳士が階下で待っておられるくらいだ。」財布を取り出せ。「空きがないというのは本当に間違いないのかね」——「行って見てまいりましょう」と門番は、財布の方をもの欲しげにちらりと見て答えるのだ。「でも多分ないと思いますがね。」彼は戻ってくると、傍聴席に近づくのはとても無理ですと本当に心をこめて保証するのである。待っていても無駄である。このような状況下で下院の傍聴者席への入場を断られてしまった場合には、そこは本当に混んでいるに違いないとすっかり納得して帰宅してよいのである。〔原注：この記事は、半クラウンという低料金で、議員たちを他の珍奇な品物と同様に、展示するという慣行が廃止される前に書かれたものである。〕

長い廊下を退き、階段を降り、パレスヤードを横断すると、我々は上院への国王入場口に接した小さな臨時の入り口の前で立ち止まる。守衛官の入場許可証によって、議場がかなりよく見渡せる記者席に入ることができるのだ。階段に注意したまえ、何しろろくな作りじゃないんだから。この小さな門をくぐると——ほらここだ。その場所のもやと下のシャンデリアの輝きに目が少し慣れてくるとすぐに、議場の与党側（向かって右側）のある重要人物が、一つの言語によるものであることを除けば、バベルにも匹敵するようながやがやという人声の中で演説しているのが見えるだろう。

あの笑い声のきっかけになった「ヒヤ、ヒヤ」という声は、例の口髭の勇猛な人物から発せられたものだ。彼は演説中の議員の背後で、壁に接した後ろの席に座り、いつものように獐狂で知的な雰囲気を見なげらせている。ひとわたり見回して、それから退け。議場の本体も両側の議員席も議員でいっぱいだ。ある者は、反対側の席の背に両足を乗せ、またある者は床の上に自分の両足をいっぱい伸ばしており、ある者は退出しようとし

ており、他の者は入場しようとしている。全員がしゃべり、笑い、ぶらぶらし、咳をし、「おう」と言ったり、質問をしたり、うめいたりしている。市の立つ日のスミスフィールド、あるいは全盛期の劇場の平土間席ですら顔負けの、およそこの世に存在する他のいかなる場所でもお目にかかれないような、騒音と騒乱の寄せ集めの光景を呈しているのである。

しかし、ベラミーのキッチン、つまり食堂のことは省略しないことにしよう。ここは両院共通の施設であり、与党と野党、ウィッグとトーリー、急進派、貴族、破壊主義者、傍聴席から来た傍聴人、そして議場内仕切りのところから来たさらに優遇されている傍聴人などが、わけへだてなく行ける場所であり、さまざまな議員諸氏が、激しい議論の最中に食の快楽で自らを慰めながらそこに留まることで、自分が完全に無所属であることを証明する場所であり、議院が採決を行おうとするときには院内幹事たちによってそこから呼び出され、良心的には何のこともやら皆目知る由もない議題について「良心的投票」を行うか、さもなければ、「採決しろ!」と大声でどなったり、時々小さな声できゃんきゃん、わんわんわん、きゃあきゃあ、その他の議員らしいおふざけをないまぜて、ワインによって触発された陽気でありあまる空想力を発散させるのである。

我々が今描写している場所へ続く、現在の臨時の下院〔英国議会の両院の入っていたウエストミンスター宮殿は一八三四年の火災で大部分が焼失した。このスケッチは後年書き直されたため時代設定はかなりあいまいになっているが、ここでは一応火災後の臨時議場のことと思われる〕の中に狭い階段を昇りつめると、右手の方に晚餐の食卓が整えられた二つの部屋がおそらく見えるだろう。そのいずれもキッチンではない。どちらも同じ目的に向けられたものではあるのだが。キッチンの方は、左手のもっと先、あの半ダースほどの階段を昇ったところだ。しかしながら、その階段を昇る前に、この上げ下げ窓のあるちょっとしたバーのような場所の前で立ち止まっていたいただきたい。そして、その唯一の住人である、黒服を着た堅実で正直そうな老人にとくに注意を向けていただきたいのである。ニコラス（この老人の名前をあげてもかまわないだろう、なぜならニコラスが公人でないとしたら、いったい誰がそうであろうか？そして公人の名前は公共の財産なのだから）——このニコラスはベラミーの店の執事であり、この店に現在来る客の中で最も年長の者が思い出せる限りの昔から同じ職にあり、全く同じような身なりをし、正確に同じことを言い続けてきたのである。ニコラスは素晴らしい給仕である。サラダドレッシングの合わせ方については彼にかなう者はいないし、レモン入りソーダ水の作り方も申し分ない。彼が作る冷たいグロッグとパンチのカクテルは特別だし、そしてとりわけチーズの鑑定に関して彼に匹敵する者はいないのだ。この老人の性質の中に見栄というようなものがあるとしたら、彼のプライドが確かにそれにあたるだろう。そして、もし彼の侵し難い冷静沈着さをかき乱すようなものがこの世に存在すると想像することが可能

であるとしたら、この重要な点に関しての彼の判断を疑うことであることだろう。

しかしながら、このすべてを君に告げる必要はない。というのは、君にほんのわずかでも観察眼があるならば、彼のなめらかで、抜け目ない頭と顔を、過去二十年の間規則的に木製のタイ留めにたたみこまれ、細かなひだのあるシャツのフリルに、それと分からないほど段々と合体している彼のきちんとした白のハンカチーフを、よくブラシのかけられた黒のスーツに包まれた彼の快適そうな姿を一目見れば、我々の貧弱な描写のコラムによって伝え得るよりもはるかによく彼の性格が分かるであろう。

ニコラスは今ちょっと本領が発揮できないところだ。古い議院でそうだったように、キッチンを見ることができないからである。以前なら彼のガラスケースの一つの窓がその部屋の方に開いており、当時は比較的年少の質問者たちの教化と利益のために、シェリダンとかパーシヴァル〔スペンサー・パーシヴァル（一七六二—一八一二）、英国の政治家〕とか、カースルレイ〔カースルレイ子爵ロバート・ステュワート（一七六九—一八二二）、英国の政治家〕とかその他大勢の人々に関する敬意をこめた質問を受けると、すべての平民の名前にはミスターを挿入しながら、明らかなに嬉しそうに答えつつ、一時間もぶっ通しで立ち続けたものであった。

ニコラスは、彼と同じ年配で同じ地位にある人間すべてと同様、時代の墮落について大いに意見を持っている。彼が政治的な意見を表明することは減多にないのだが、選挙法改正案が通過する直前に〔一八三二年〕、ニコラスが徹底的な選挙法改正論者であることを我々は何とか確認することができたのであった。ところが、選挙法改正後の最初の議会が開会されて間もなく、彼が最も頑迷固陋な保守反動であることを知ったときの我々の驚きはいかばかりであったことだろう。それは非常に奇妙なことであった。ある種の人間は必要に迫られて意見を変えるものだし、また別な種類の人間は便宜上、また別な種類はインスピレーションによって変えるものである。しかし、ニコラスに何らかの点で何らかの変化を生じるということは、我々にとっては夢想だにできなかった事件であり、あり得ないと見なしたはずの事件であった。首都圏各地区に国会議員を選挙する権限を与えた条項に対する彼の強い反対意見もまた、全く理解し難いものであった。

我々はついにその秘密を発見した。首都圏選出の議員たちはいつも自宅で食事を取ったのである。あの悪党どもめが！アイルランドに議席を追加するという件に関しては、さらにいっそう悪いことだ——間違いなく憲法違反だ。何しろ、アイルランド選出議員ときたら、ここに上がってきては、イングランド選出議員三人分の食事以上の物を一人でべろりと食べてしまうんですからね。ワインは飲まずに、ビールを半ガロンずつがぶ飲みするし、マンチェスター・ビルディングスとかミルバンク・ストリートの宿舎に戻るとウイスキーの水割りを飲むんですよ。その結果どうなると思いま

すか？どうにもこうにも、こんな客のおかげでこの店はだめになっちまいましたよ、本当にだめになっちまったんですぞ。ニコラスというのは風変わりな老人で、議場そのものと同じくらい完全に議事堂の一部になりきっている。そもそも彼が前の建物を出たことに我々は驚いたのだし、あの火事の翌朝、上品な風采の黒服を着た紳士が、炎が最も激しく燃え盛っていたとき、上の方の窓に姿を見せ、議場と運命を共にするぞ、と断固たる決意を表明したという感動的な記事を新聞で見かけるのではないかと十分に予想したほどであったのだ。彼は力づくで連れ出されたに違いない。しかしながら、ともかく連れ出されたのであって、この前の議会以来ずっと紙箱に入っていたかのように、いつもと変わらない姿でここにまたいるのである。彼は、我々が描写したように、彼のいつもの場所に毎晩立っている。そして、特色ある人物というのはめったにいないし、忠実な召使というのもめったにいない存在であるから、彼が末長くそこに立っていますようにと、我々は祈るのである。

さて、キッチンで席を占め、部屋の一方の端にある大きな暖炉と焼き串回転器——反対側の端にはグラス類を洗ったり水差しの水気をきったりするための小さなテーブルがある——聖マーガレット教会向い側の窓の上にある時計——樞材のテーブルや蠟燭——ダマスク織りのテーブルクロスやむき出しの床——テーブルの上の皿類や陶器類、それに火の上の焼き網、その他いくつかの、この場所特有の変則的な事物とかを一通り見渡したところで、そこにいる人物たちの中でその立場とか馬鹿げた行為の故に、きわめて注目に値する二、三の人物に注意を向けていただくことにしよう。

時刻は十二時半であり、もう一時間か二時間は採決はないだろうと予想されているので、数人の議員たちが、議場の仕切りのところで立っていたり脇の議員席のどこかで居眠りしたりするよりはましだということで、ここでのんびりと時間を過ごしている。茶色っぽい白の帽子をかぶり、ブーツの脚の部分に半分ほど延び出しているゆるんだズボンを履いて、焼肉用スクリーンに寄り掛かり、自分は何事かを考えているのだと自分を欺いて信じこもうとしているらしいあの著しくぎこちなく、風采の上がらない男は、一選挙区民の英知を一身に凝縮した、下院議員の素晴らしい見本である。あの黒みがかってはいるが、何とも表現のしようがない色合いの——というのは、もしそれが本来茶色であったとしたら、長い間使用されていたため黒みを帯びてしまったのであろうし、またもしそれが本来黒色であったとしたら、その同じ理由で赤茶色を呈するようになったのであろうが——かつらを見てみたまえ。そして、あの大きな馬の目隠しのような眼鏡が、あのきわめて知的な顔の表情をいかに著しく引き立てているかを見てみたまえ。まじめな話、これ以上どうしようもないほどの鈍重の極致を表した表情を、ご覧になったことがかつてあるだろうか、あるいはこのように奇妙に組み立てられた体型を目撃したことがありだろうか。彼は決してす

ぐれた弁舌家ではないのだが、彼が実際に議会で演説するときの効果には、全く抗し難いものがある。

彼に今挨拶をした、あのとがった鼻の小さな紳士は、国会議員であり、元上級議員であり、一種のアマチュアの消防士である。彼とあの有名な消防犬とは、国会両院の大火の際、大活躍したことが目撃されている——この一人と一匹は上やら下やら中やら外やらを走り回り、人々の足の下に入り込み、自分たちが大いに役立っているという確信をもって皆のじゃまをしまわり、大声で吠えだしていたのであった。犬の方は消防ポンプと一緒に犬小屋へおとなしく戻っていったが、紳士の方はこの事変の後何週間もの間絶え間なく大騒ぎを続けたものだから、全くの厄介者になってしまった。しかしながら、これ以上国会の火事など起こらなかつたし、その結果彼にも、自分がいろいろな名画を守るために、それらを額縁から切り取ってやったこととか、その他の偉大な愛国的奉仕活動を果たしたことなどを新聞に書き送る機会もなくなってしまったので、段々と昔の落ち着いた状態へと後退していったのであった。

あの黒服を着た女性——いやあの主日法案提出者の子爵殿があごの下を軽くなでてやった方じゃなくて、背の低い方だよ——あれが、ベラミーの店のヘーバー〔ギリシャ神話でオリンポスの神々の酌婦〕こと、「ジェーン」だよ。ジェーンは彼女なりにニコラスと同じくらい偉大な特色ある人物だ。彼女の主たる特徴は、大部分の客に対する徹底的な軽蔑であり、彼女の卓越した特質は、賛美されるのを好むということだ。彼女の傍の若い議員が彼女の耳に何かちょっと聞き取れない言葉を（というのは彼の話し方は何らかの理由で不明瞭なので）ささやくのを聞くときの彼女の上機嫌さや、彼が彼女を引き留めているその腕を、返事代わりにフォークの柄でいたずらっぽく小突くところなどを見れば、そのことは見てとれるはずだ。

ジェーンは当意即妙の受け答えがなかなか上手で、しばしばよそ者の心に少なからぬ驚きを生み出すくらい気前よく、また遠慮も抑制もまるでなしに、それらをふりまくのである。彼女はニコラスにも冗談を言うのだが、彼のことは非常に敬意をこめて尊敬している。ニコラスがこの冗談を眉一つ動かすことなく無感動に受け止め、通路でしばしば発生する牧歌的なおふざけや戯れを（これらはジェーンの唯一の息抜きであり、しかもごく罪のないものである）、冷静に傍観しているところなどは、彼の人物のきわめて面白い側面である。

部屋の向こうの端の隅のテーブルに座っている二人の人物は、過去何年にもわたって、ここの常連であった。そしてそのうちの一人は、輝かしい時代の最も輝かしい人物たちとこの建物の中で祝宴を張ったことが何度もあったのである。彼はそれ以来もう一つの議院の方に移り、彼の気の合った仲間たちの大部分はヨリックの運命を共にしてしまったので〔シェイクスピアの『ハムレット』中の髑髏となった道化〕、彼がベラミーの店に来ることも比較

的の少なくなってしまう。

もし彼が本当に今夕食を取っているのであればとしたり、一体何時に昼食を取ったのであろうか。二つ目のランプステーキのたっぷりした塊が消えてしまったが、彼は最初のやつを、窓の上の時計で計算すると、四分四十五秒でたいらげたのであった。こんなフォールスタッフ〔シェイクスピアの『ヘンリー四世』等に登場する肥満した喜劇的人物〕そっくりの人物がかつていたであろうか。彼がステーキの余分な肉汁を受けるために顎の下に置いていたナプキンを取って、スティルトン〔英国産のチーズの一種〕を満足そうに眺めている様子や、しろめのポットに入って彼のために特別に出されたポーターをいかにうまそうに飲んでいるかを見てみたまえ。何層もの固形物や芳醇なワインを深々と飲んだ結果抑えられている彼のかすれた声を聞いて、これほど正真正銘の健啖家そのものという人物を見たことがあるか言ってくれたまえ。そして、この男こそシェリダンの議会での大酒盛りの相手であり、彼を家まで送り届ける貸し馬車の馬車の馭者がかつてでた男であり、パーティ全体を、そんな気はなかつたのに、めちゃめちゃにしまった男であると決めつけるかどうか、言ってくれたまえ。

この男の声と外見は、同じテーブルに座っているやせぎすの、きしるような声で話す老人のそれとは何と面白い対照をなしていることであろうか。この老人は、そのちょっとしゃがれたちゃぼのような声を最高音まで高めながら、自分が発する一言ごとに、必ず最初に、こんちきしょう、とか、あんちきしょう、と言うのであった。皆に「船長」と呼ばれているこの人物は、ずいぶん昔からベラミーの常連であって、「議会在閉会した後」でも居座る常習者であり（ジェーンの目から見ればこれは償うことのできない犯罪である）、アルコールと水の完全な人間貯水槽である。

老貴族——というより老人と言った方がよからう、というのは彼が貴族に列せられたのは比較的最近のことであつたのだから——彼は熱いパンチの巨大なタンブラーを取り寄せる。そして相手の方は罵っては飲み、飲んでは罵り、また煙草をふかす。議員たちが大騒ぎしながら次々にやってきては、「大蔵大臣が立ち上がって演説中だぞ」と報告し、また、採決の間の元気づけにブランデーの水割りのグラスを求める。夕食を注文していた連中がそれを取り消して、階下へ行こうとしていると、突然とてつもなく激しくベルが鳴る音が聞こえ、「さ・い・け・つだあ」という叫びが聞こえる。これだけで十分だ。議員たちは一目散に走り去る。部屋は一瞬にして空っぽになり、騒音は急速に静まり、最後の階段の上の最後のブーツがきしる音が聞こえると、後に残されたのは怪物のようなランプステーキだけなのである。

ジン酒場

いろいろな商売が、象とか犬などがとくに罹患しやすい病気にかかってしまっ、定期的にまるっきり、かつ全く、かつ完全に発狂してしまうというのは驚くべきことである。動物と商売の大きな相違とはといえば、前者がある程度の節度を持って発狂するということである。彼らの狂いぶりにはきわめて筋が通っているのだ。我々はこの緊急事態が発生するであろう時期を予測し、相応の対策を講じることができる。象が発狂しても、我々にはすっかり準備ができています。すなわち、殺すか治すかであって、薬か銃弾か、バラの砂糖漬けにくるんだカロメルかマスケット銃の鉛弾かというわけである。犬が夏の季節に不快なほど熱した様子に見えて、舌を四分の一ヤードも口からだらりと垂らして、通りの陰の部分をとことこ歩いていたりしたら、この犬を涼しくしてやろうという配慮から立法府の思慮深い命令に従ってあらかじめ用意されていた分厚い革の口輪が、ただちにその頭にはめられ、彼はその後六週間ひどく不幸そうな様子をしているか、さもなければ、法律上発狂したことになる、言わば国会の法律によって気違いになるのである。しかし、この商売というやつは、まるで彗星みたいに気まぐれだ。いや、彗星より始末が悪い、何しろ病気の前兆となる奇怪な状況の再来を予測することは誰にもできないのだから。その上、その感染は広汎なものであり、病気の広がる早さときたら、ほとんど信じられないくらいなのである。

我々が言わんとしていることについて、二、三の例証を挙げることにしよう。六年か八年前に、ある伝染病が、リンネル生地商とか小間物商の間に表れ始めた。主な症状は、板ガラスを異常に好むこととガス灯と金箔に夢中になることであった。この病気はしだいに進行し、ついに猖獗をきわめるに至った。町のいろいろな場所にあった静かで埃っぽい古い店が取り壊され、その代わりに、スタッコ塗りの正面と金文字のある広々とした店舗が建造された。床にはトルコ絨緞が敷かれ、屋根は巨大な柱で支えられ、ドアは一ダースのガラス板を一つにした窓に変えられ、一人だった店員は一ダースになり、このままでは事態がどこまで進行するか見当もつかないほどであった。しかしながら、幸いなことに、このような症例の診断については破産判定委員会が精神異常判定委員会に負けないほど有能であることが判明し、ちょっとした取監〔当時は支払い不能な債務者は債務者監獄に入れられた〕と穏やかな監査によって驚くべき効果もたされたのであった。疫病は弱まった。それは終息した。一年か二年が比較的平穏に過ぎていった。突然、それは薬種商の間で再び勃発した。症状は同じだったが、店のドアの上に王家の紋章を貼り付けたいという強烈な欲望とマホガニー、ワニス、高価な床敷物へのすさまじい渴望がさらに加わっていた。それからメリヤス商が感染し、気違いじみた無鉄砲さで店の正面を取り壊し始めた。この熱狂

は再び鎮静化して、民衆がそれが完全に消滅したことを喜び始めていたところ、パブの主人や「ワイン蔵」の主人たちの間で十倍もの激しさで再発したのである。その瞬間以来、それは、以前の症状をすべてひっくりめめた様相を呈しつつ、前例のない速度で彼らの間に広まり、町のあらゆる場所に突進してゆき、すべての古いパブを打ち壊し、あらゆる街角に宏壮な邸宅や石の欄干、紫檀の調度品、巨大なランプと照明付き時計を置いていったのであった。

これらの店の営業ぶりが大規模であること、それにその中の最小の店でさえも、これみよがしにいくつもの部門に分かれているということは、面白いことである。あるドアにあるすりガラスの立派なプレートは「勘定場」を示しており、また別なものは、「ボトル部」を、三つ目のものは「卸売部」、四つ目のものは「ワインプロムナード」を示しているといった具合であり、我々はいずれ「プランデー用呼び鈴」とか「ウイスキー用入口」などにお目にかかることになるのではないかと、毎日予測するほどである。それから、ジンの色々な種類に魅力的な名称を付けようとして工夫がこらされる。そして、社会の中の酒飲み族は、それに匹敵する大きさの物といえば、その下に書かれた数字だけという、巨大な黒と白の文句を凝視しながら、「谷の華」、「本蒸留」、「掛け値なし」、「カクテル好み」、「本物ぶっ倒れ」、「銘酒バター・ジン」、「火炎の舞」、その他一ダースもの、いずれ劣らぬ魅力的で健全なるリキュールのうち、さてどれにしようかと、楽しく迷うことになるのである。このような種類の店には通り一つおきに出会うのであるが、それらは、例外なく周辺の界隈の汚さと貧困ぶりに正確に比例して数が多く、また豪華なのである。ドルーリー・レーン、ホルボーン、セント・ジャイルズ、コヴェント・ガーデン、クレア・マーケットやその近辺にあるジン酒場は、ロンドンでいちばん立派なものである。これらの大通りの近くには、この大都市のどの場所よりも多くの汚濁とごみごみした悲惨さがあるというのに。

読者の中でそのような場面を観察する機会を持ったことがないかもしれない方々に知っていただくために、一つの大きなジン酒場とその普通の顧客たちのスケッチを試みてみることにしよう。そこで、我々の目的によくかかった場所を発見することを期待して、我々は、オックスフォード・ストリートからそこを区分している狭い通りや汚い小路を抜けて、ドルーリー・レーンとトテナム・コート・ロードの突き当たりで醸造所に接しているあの伝統の場所、事情通には「カラスの巣」〔ロンドン最悪のスラム街、一八四〇年代後半に取り壊された〕としてよく知られた場所へと向うことにしよう。

ロンドンのこの地域の不潔で悲惨な状態は、それを実際に目で見ただけの者（そういう人々が多い）には、とうてい信じられないようなものである。ぼろや紙きれでつぎはぎされた壊れた窓のあるみじめな家々。部



屋の一つ一つにはそれぞれ異なる一つの家族が間借りしていて、また多くの場合には二つあるいは三つもの家族が間借りしており、地下室には果物と砂糖菓子の製造業者が、表の部屋には床屋と燻製ニシン売りが、裏には靴屋が、二階には小鳥屋が、三階には三家族が、屋根裏には飢え死にしかけた者たちが、通路にはアイルランド人が、表の台所には「音楽家」が、裏の台所には一人の雑役婦と五人の腹をすかせた子供たちがいる。いたるところ汚物だらけだ。家の前にはどぶが、背後には排水渠がある——窓からは洗濯物が干されたり、汚水が捨てられる。もつれた髪の毛をした十四、五歳の少女たちが、裸足のまま、ほとんど唯一の衣服である白の大外套を着て歩き回っている。ありとあらゆる大きさの上着を着ているか、全く着ていない、あらゆる年齢の少年たち。種々雑多な乏しく汚れた衣服

を着た男女が、ぶらつき、がみがみどなり、酒を飲み、煙草をふかし、口論し、喧嘩をし、罵り合っている。

角を曲る。すると何という違いだろう。すべてが明るく輝いている。反対側の二つの通りの始まりの部分形成している壮麗なジン酒場から、多くの人々の話し声が流れ出ている。そして、この奇抜な装飾の施された欄干、照明付きの時計、スタッコのバラ花飾りに囲まれた板ガラスの窓、豪華に金めっきされたバーナーに入った溢れるばかりのガス灯の備わった華やかな建物は、今見てきたばかりばかりの暗黒と汚濁と比べると、全く目もくらむばかりである。内部の方は外部よりもさらにいっそう華やかである。上品な彫刻の施された、フランスワニスのかけられたマホガニー製のバーが、その店の幅いっぱい広がっている。そして、二つの側廊があって、そこには大樽が並んでいる。それぞれ緑色と金色に塗られ、軽い真鍮の柵の中に囲い込まれ、「オールド・トム、549」、「ヤング・トム、360」、「サムソン、1421」などといった刻印が付いている。これらの数字は、どうやら「ガロン」に相当するものであろうと我々は推測した。バーの向こう側には堂々として広いホールがあって、そこにも同じ魅惑的な容器がたくさんあり、その周囲には同じく十分なストックを備えた回廊がめぐらされている。カウンターの上には、通常のスピリッツ用器具の他に、菓子やビスケットの入った小さな籠が二、三個置いてあって、中身が不法に抜き取られるのを防ぐために、その上には注意深く枝編み細工の蓋がしてある。その後ろには大きなネックレスをしてけばけばしい服を着た二人の娘がいて、アルコールや「カクテル」を分配している。この店の雇われ店長が彼女たちを手伝っている。この男は太った粗野なやつであるが、自分が抜け目のない人物であることを見せてやろうとして、また、自分の薄茶色の頬ひげが最大限に引き立つようにしようというつもりで、毛皮の帽子をかなり片方に傾けてかぶっているのだ。

バーの左手の小さなベンチに腰を下ろしている二人の年取った洗濯女たちは、給仕してくれている若いご婦人たちの頭飾りと高慢な態度にかなり圧倒されてしまっている。彼女たちは、自分たちのジンとペパーミントの半クォーターン [クォーターンは四分の一パイント] 分を相当にうやうやしく受け取り、「あの柔らかいビスケットを一つ」という注文に「お嬢さん、お願いだけども」という前置きを付けるのだ。彼女たちはまた、茶色の上着とびかびかのボタンを着けた若者の厚顔無恥な振る舞いにすっかり仰天してしまう。こいつは、二人の仲間を案内して入って来ると、まるで生まれてこの方緑色と金色の装飾品には慣れっこになっているというふうなぞんざいな態度でバーの方へ歩み寄ると、ひどく冷静にご婦人たちの一人に「くわーんと三分の一グラスを一つだ」と要求するのである。「あなたはジンになさいますの？」とその若いご婦人は注文の品を注いでから言う。た

だし彼女は、さっきのウインクが自分に何の効果も及ぼしていないことを示すために、正しい方向以外のあらゆる方向に視線を向けるべく注意を払っている。「僕はそうだよ、メアリー」と茶色の服の紳士は答える。「あいにくだけどあたしの名前はメアリーじゃないわ」と、その若い娘は釣銭を渡してややほっとしながら言う。「そうかい、もしそうだとすると、そのはずなんだがな」とこの強引な男は答える。「僕が会ったメアリーという女の子は例外なく美人だったぜ」ここでその若い娘は、こういう場合にどういうふうにして顔を赤らめたらよいのかを正確に思い出せなかったために、急にこの戯れを打ち切って、ちょうど入ってきた、色あせた羽飾りを着けた女性に声をかけた。この女は、誤解が生じるのを防ぐために「こちらの旦那が支払いますからね」とまず明確に述べた後で、「ポートワインを一杯と砂糖を一かけら」注文する[この女性は明らかに売春婦である]。

「ちょっと一杯ひっかけに」やってきたあの二人の老人たちは、数秒前に三杯目のクォーターンを飲み終えたところである。彼らはぐでぐでんに酔っ払ってしまっている。そして、それぞれ「ラムシユラブ [ラム酒にレモン果汁や砂糖を入れたもの] を一杯」飲み終えた、あの太って気持ちよさそうに見える老婦人たちは、世の中の厳しさについての不平で意気投合し、一人が全員に一杯ずつおごることに同意した上で、「嘆いたところで何にもなりゃしないし、善人なんてめったにいやしないんだから、最大限に利用しなさいよってのが私の考えさね、それだけのことさ」とおどけて述べた。この意見は、金を払う必要のない者たちにとっては限りない満足を与えてくれるものようである。

夜もふけてきて、ひっきりなしに出たり入ったりしていた男や女それら子供たちの群れもすっかり減って、時折二、三人がばらばらに入ってくるだけとなった。この連中は、憔悴と病気の末期にある、寒そうでみじめそうな外見の者たちである。店の奥の端では、一群のアイランド人労働者が、この一時間というもの、お互いに握手をしたり、殺すぞと脅したりするのを交互に続けていたが、論争のあげくに激高し、そして、そのいさかいを調停しようとする熱心だった男を黙らせることができないものだから、彼を殴り倒し、おまけに踏みつけるという手段に訴える。毛皮の帽子の男とボーイとが飛び出してゆく。それに続くのは落花狼藉の場面だ。アイランド人たちの半数は締め出され、残りの半分は取り残される。ボーイはたちまち樽の間に殴り飛ばされ、店長は誰かれかまわず殴りつけ、誰もが店長をぶん殴る。女給たちが悲鳴を上げる。警察が入ってくる。あとは、腕やら脚やら棒やら破れた上着やら叫び声やら格闘やらがごちゃごちゃに混じり合った混乱状態である。関係者の何人かは警察署に連行される。他の者たちはこそそと家に帰ると、文句を言ったというので女房を殴り、厚かましくも腹をすかしているというので子供たちを蹴り飛ばすのである。

この主題について、我々ははごくあっさりとしてスケッチしたのである。それは単に我々の限界上そうせざるを得ないためばかりではなく、もしこれ以上深追いすれば、痛ましくおぞましいものになってしまうからなのだ。善意の紳士たちも慈悲深い淑女たちも、こうした巢窟に通ってくる連中の少なからぬ部分を占めている酔っぱらって呆けた男たちやみじめで零落した哀れな女たちの描写からは、申し合わせたように冷淡に嫌悪を示して顔をそむけるのだ。彼らは自分たちの清廉潔白ぶりを気分よく意識しながら、男たちが貧困に苦しみ女たちが誘惑に負けている [売春に走っていることを婉曲に言っている] ことを忘れていたのである。ジンを飲むことはイングランドでは大きな悪であるが、しかし、悲惨と汚辱とはさらに大きな悪なのだ。そして、貧民たちの家が改善されないうち—飢え死にしかけている哀れな男に、わずかな収入を投じて自分自身のみじめさの一時しのぎの忘却に救いを求めるようなことはするな、それを家族に分配してやれば一人一口のパンが食べられるはずだろう、と説得しないかぎり、ジン酒場の数も華麗さもいや増すばかりであるだろう。もし禁酒協会が、飢餓、汚濁、そして濁った空気に対する解毒剤を提唱するか、さもなければ、レテ [黄泉の国にある忘却の川、その水を飲むとこの世でのすべてを忘れるとされる] の水の入った瓶の無料配給所でも設置することができるのであれば、ジンの宮殿も過去のものとなるであろうに。